

医療・急性期(病病連携)

発症直後、支援の中で生活行為の目標に気付くことができた事例

急性期リハ事例	年齢:53歳 性別:男性 疾患名:左被殻出血		介護保険 未申請
	<p>【介入までの経緯】病前は息子と2人で車専門のクリーニング店を経営していた。今回の発症により右上下肢重度麻痺を呈し当院に搬送された。入院翌日より作業療法が開始された。</p> <p>【本人の生活の目標】本人:<開始時>今は何も考えられない → <1週間後>できることなら仕事に復帰したい。 家族:少しでも動けるようになってほしい。</p>		
	開始時(入院3日目)	中間(入院2週間目)	終了(入院4週間目)
ADL・IADLの状態	<ul style="list-style-type: none"> ○食事はベッド上で左手でフォークを使用している。 ○起き上がりや座位は重介助を要する。 ○車椅子に座っていると10分程度で疲労し、ベッドに戻る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○車椅子上で食事が可能になった。 ○車椅子の乗車時間はリハビリテーションの時間を含め2時間ほど可能になった。 ○起き上がりや座位保持は軽介助で可能となった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○病棟内は車椅子を自ら操作して移動できるようになった。 ○トイレ動作は手すりを使用し、見守りの下自ら行えるようになった。 ○復職に対する本人の思いを転帰先へ申し送った。
生活行為の目標	○車椅子上で食事をすることができる。	○病棟のトイレで排泄ができる。	【考察】発症直後から生活行為の目標を聞き取ることは困難な場合も少なくない。本人、家族から病前の様子を聴取し、仕事に対する思いを聞き出すことができた。車椅子を使用した座位保持練習で仕事で行っていた内容を組み込んだことや上下肢の機能が向上してきたことで本人自身で今後を考えられる機会ができたと考えられる。
介入内容	<ul style="list-style-type: none"> ○関節可動域練習 ○右上下肢機能向上練習 ○車椅子上での座位保持練習 	<ul style="list-style-type: none"> ○関節可動域練習 ○右上下肢機能向上練習 ○端座位保持練習 ○トイレ動作練習 	



結果：まず生活上必要な基本的な動作能力の向上やセルフケアに対する介助量が軽減に対して支援することができた。その中で本人自身が仕事に戻りたいとの思いに気付くことができた。

課題：転帰先で円滑に生活行為に向けた支援ができるよう、急性期では機能だけにとられない支援方法の浸透が必要と考える。